# 第 10 回　コラム集「こどもと共に育つ」

　コラム集「こどもと共に育つ」の第 10 回目になります。こどものひろばで活動し、現在も子どもに関わっておられる方にそれぞれコラムを書いてもらっています。小学校教諭、スクールソーシャルワーカー、カウンセラー、介護福祉士、ユースワーカーという様々な立場の 5 名の方に、日常の出来事や子どもたちを取り巻く環境などそれぞれの目線でコラムを書いてもらっていますので、ぜひご覧ください。バックナンバーはホームページ最下部にある専用ページ（コッペパン コラム集「こどもと共に育つ」）からご覧いただけます。

つだです。「地域に住むすべての子どもたちが、心豊かに育つことを目指し…」、主に学校や家庭で居場所を失った子どもたちに居場所づくり活動を行ってきました。出来るだけ一人一人に合った人・活動内容・場所を考えながら奔走する中で、「そもそも大きい枠組み（学校など）の中で、漏れ落ちないように出来ないものか？」という疑問が常にありました。教員になろうと思ったのも、「すべての子どもたちが色んな経験ができ、楽しい思い出が作られるはずの学校で居場所を失う子どもが一人でも少なくなれば…」という想いからでした。

さて、今年度のクラスには、昨年度に不登校や授業からの飛び出しなど、学校や教室内で居づらさを経験した児童がいます。1 学期を終えた時点では、その子どもたちも毎日学校に登校し、一度も飛び出しをしていません。まだ、たった数ヶ月だけの結果で自分がやってきたこと、伝えてきたことがどう影響しているかは分かりません。ですが、今、教員としての自分ができる教室で「色んな経験ができ、楽しい思い出を作れる“居場所づくり活動”」を頑張っていこうと思います！

P.S.写真は今年の旅行先です。ど～こだ？

こんにちは！さとみんです。
この夏、息子とキャンプに行ってきました～
学生時代は、ずっとキャンプのことを考えて過ごしてきたので、我が子とできてとても嬉しかったです。
1 歳の時にも同じキャンプ場に行ったのですが、当時は全て親がやるだけでしたが、今回は子も火おこしに挑戦！
どのように薪を組めばいいのか教えながら一緒にやりました。
子は 1 発でつけることができ、火おこしできた～！僕は 1 回でできたんだよ！とにこにこして、自信になったようです。

川遊びも自分で足場を確認しながら進んで行き、好みの石を探したり、水の冷たさや川の流れを感じていました。
自分が好きでやってきて、いいと思っていることに、子どもが興味をもって取り組んでくれると、やはり嬉しいですね。
これからもいろいろな体験ができるよう、環境を作っていこうと思います。

なんだかんだともう 9 月。子どもたちの夏休みも終わろうとしている今日この頃ですが、みなさんはお盆、ゆっくりできましたでしょうか？僕は、休みがあると週末なんかと一緒で、その後には必ず休み明けがあって、「あぁー明日から休みじゃなくなるー」とブルーになってしまいますが、それは不登校の時の僕にとっても同じでした。夏休みって学校に行っていない悪い自分を否定しないで済む時間であり、家族とも学校の話をしなくていい時間が多かったので、調子も良くなるし、エネルギーも溜まっていく時期だったように感じます。ただ、後半になるにつれて、本人にとっても家

族にとっても、それまで考えずにいられた学校（進路）という NG ワードと向き合っていかなければならないしんどい時期でもありました。

僕の場合ですが、学校にはいくべきだろうという刷り込みやまわりのあたりまえから、「行きたい」と錯覚していたような気がします。（実際行きたいという気持ちも何割かはあったと思いますが。）そういった気持ちを持っていたので、支援者や家族からの「どうする？」という気持ちには「行きたい」と答えていたし、（学校に）行くためにどうすればいいのか、何ができるのかを考えて、夏休み明けトライしては、失敗してという傷つき体験を繰り返していたような気がします。

自分も子どもと関わる上で、「行きたい」という気持ちはもちろん前向きで大事にしてあげたいと思いますが、その背景も考えてあげないと、「行きずらい」という気持ちに蓋をして、見ないふりをしたままにしてしまう気がします。これでは、根本的には何も変わらないし、繰り返してしまうかもしれません。そんな経験をしてきた僕の自分なりの結論ですが、「どうすべき」ではなく自分の「どうしたい」を大切に考えれるようになってくれたらいいなぁと思っております。では今回はこのへんで。（たくと）

みなさん、こんにちは。矢盛です。
第 2 回目のコラムでは私が関わる子ども・若者たちをテーマにしたいと思います。私が働くサポステに訪れる若者は、学校や社会からドロップアウトして、長い引きこもり期間を経て来所します。実は、多くの若者が義務教育年齢の段階からすでに不登校気味で、どこにもキャッチされずに社会から孤立した状態にあります。若者と出会うと、「なんで支援につながらなかったんだろう」「なにが孤立する要因だろう」とよく考えます。そんな中、先日 1 人の若者が語ってくれた言葉が印象的だったので紹介したいと思います。

「家族からの DV や友達からのイジメで早々に学校はリタイヤしました。両親は父がアル中、母はネグレクト。今思うとヤバい家庭環境だと思う。でも、子どもの時ってその環境が当たり前だから、自分が支援される側の人間って考えたことがなかった。学校で命の電話のチラシを貰ってたけど、自分には関係ないと思ってた」。

この言葉が全てを語ってくれてる気がしました。当たり前の生活の中で自らのしんどさに気付き、SOS を出すのってすごく難しい。本当はもっと早い段階で周りが気付けたらといつも思います。そのために必要なことって、日常的に声を掛け合い、気に掛けてくれる他者の存在だと思います。最近はそういう、“日常的に挨拶し合える気さくな隣人”を若者たちの世界に如何につくっていけるかが、自分の大事にしたいことだなと考えています。

ぴーちゃんです。最も苦手な季節である夏を乗り越えれそうで少し余裕がでてきました。

先日、職場の小児科 Dr.勉強会に参加しました。テーマは、診察では何を大切にし、どのように保護者に支援を伝えるか、などです。最も心に残ったのは、"その子の特性に合わせて環境を柔軟に変化させることが大切"という言葉でした。すなわち、その子の特性や困り感に合わせて周囲が環境を調整するということです。本人が変化するための支援も大事な要素ですが、本人に合った環境になるよう周囲が意識することも肝要である、ということです。この考え方は発達に限らず、支援を必要とするどの現場でも意識すべき考え方ではいかと思います。

ただ、相手に合わせて環境を変化させることは簡単ではなく、状況を見立て、それに応じた支援、資源を適切に提供できるのか？まず資源を支援者がどれだけ出せるのか？まだまだ理想通りとはいかないものですが、資源や支援の引き出しをもっと持てるようにもう少しアンテナを張ろうと感じた最近でした。